

---

# 神子の願いは

霜月 雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神子の願いは

### 【Nコード】

N76690

### 【作者名】

霜月 雪

### 【あらすじ】

金の髪に、銀の瞳。それを宿す者は、神子だ

。

神子として、毎日を神殿で暮らしているレイと、そんな少女と唯一会話できるセキリの、短い話。

**（前書き）**

ほのぼのとした話がかきたくて書いた話です。

ほのぼのかどうかは知りませんが・・・。

金の髪に、銀の瞳。

それを宿す者は、神子だと、

そう、言い伝えられてきた。

神子は、死なせてはならない。

大事に、大事に

誰にも、なににも、染められてはならぬ、と

世界が産まれてから、ずっと、ずっと、そう伝えられてきた。

「レイ！」

神殿しんでんに響く、自分と呼ぶ声に、レイは、ふと瞼をあけた。視界に移るのは、翡翠ひすいの瞳だ。

「セキリ・・・？」

少女、レイは首を傾げる。おかしい、今日は、彼はこれない、と言っていたはずだ。

「今日は、これないって・・・」

困惑した様子で、レイは眉を寄せる。それに、セキリは苦笑した。

「予定が変わったんだ。さ、いこう？」

差し出されたその手に、安堵した。

これない、と聞いて、寂しかったから。

風で、レイの金の髪が翻る。腰をおおうほど長い髪は、毎日くる神官たちが整えてくれるため、痛んでいない。その髪を目であって、セキリはレイを見つめた。

見つめられ、レイはまた、こてんと首を傾げる。

「どうしたの？」

「いや、ちよつと、綺麗だなあ・・て」

その言葉に、レイはまた首を傾げる。

「綺麗？」

「レイの髪だよ。綺麗だ」

そう言つて、一束その髪を優しく掴み、しげしげと見る。

レイは軽く目を見張つたが、おもむろにセキリのほうへ手を伸ばす。そして、その漆黒の髪を梳いた。

「セキリの髪のほうが、綺麗だよ？」

息なり言われ、セキリは目を丸くしたが、やがて、照れたように微笑んで、ありがとう、と言った。

「普通、ここで照れるのは女の子のほうだと思っただけだなあ・・・」

そんな呟きが聞こえてきて、レイは笑った。

神子の住む神殿には、食事を運ぶ者と、服装、髪を整える者と、身の回りのことを手伝う者の神官しか、入ってこない。神子とは、とても尊いものであり、人間の慕うべき象徴だからだ。

レイは、今まで、神殿にくる神官と会話したことがなかった。そういうものだとわかつていたし、自分は一生、人と会話することはないのだろう、とわかつていた。神子は、生涯を神殿で過ごさなければならぬのだから。

息苦しかった。いつも、ほとんどを、神殿の敷地内の庭で、一番大きい木にもたれかかって日々を過ごしていた。そんなある日。

「あ、もしかして、君が神子？」

「・・・・・・え・・・・？」

セキリは、息なり神殿に来たと思えば、レイに微笑みかけた。王直々の命で、ここに來たのだと語った。しかし、優先順位がある。普段の仕事の先にして、ここに来るのは、仕事が終わってからだと。本来は、人間が神子と会話するなんて暴君らしい。

しかし、レイがあまりにも普段を庭で過ごしているため、国側としては不安なのだろう。

セキリは、そんな仕事云々として、いつも話しかけてくれた。外の他愛もない話を聞かせて、帰っていった。

彼と過ごす時は、楽しかった。

だから、どうか、願いが叶うなら。

「レイー？服が汚れるよ。ていうかもう汚れてるし！」

あーあと呆れたように笑いながら、汚れた箇所を手で払う。

そして、セキリは、レイを見て首を傾げた。

「なんか、嬉しいことでも、あった？」

きつと、自分は今、嬉しそうに笑っているのだろう。

「ううん。なんにもないわ。服、汚れちゃったわね」

裾をつかんで服を見るレイに、セキリは顔をしかめた。

「レイが地べたに座って寝てるからでしょ？あとで俺のほうから神官に謝っとくよ」

神子から謝られたら、おそらく神官は失神するだろう。

それが目にうかんで、レイは少し笑った。

「笑い事じゃ、ないんだからね？神官にぐちぐち文句いわれるの、

俺だから」

子供のように頬をふくらませ、セキリに、レイは笑う。もう17歳なのに、そんな仕草が似合うのはなぜだろうか。

「セキリがこなくなったら、私、泣くから」

「それは困る」

冗談まじりの口調で言うが、本気だった。彼がここにこなくなるなら、自分は絶対泣くだろう。

泣いて泣いて、彼自身の決意だったらもっと泣いて。

「今、幸せ？」

自分より頭一つ大きいセキリの目をのぞき込むように見る。セキリは、レイに視線を合わせるように少しがんだ。

「幸せだよ。すごく」

そう言った顔に、瞳に、嘘はなかった。

もし、叶うなら。

もし、願いを聞いてくれるなら。

なによりも、誰よりも、彼の幸せを、願う。

「レイ」

今日もまた、彼は。

変わらない笑顔で、神子の名を呼んだ。

（後書き）

セキリの年齢を20歳から17歳に変更しました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7669o/>

---

神子の願いは

2011年9月29日14時31分発行